

黒 崎 卓

『貧困と脆弱性の経済分析』

勁草書房 2009.1 ix+307 ページ

I.

本書は、開発途上国における貧困・脆弱性の諸問題を扱った研究書である。著者は、『開発のミクロ経済学』(黒崎(2001))において、途上国における市場の不完全性や社会経済諸制度の問題を応用ミクロ経済学的手法を用いて分析する「開発のミクロ経済学」の分野を体系的に整理し、日本において広く知らしめたが、本書においては、貧困と脆弱性の問題に焦点を当てたうえで、そこに「開発のミクロ経済学」や「開発のミクロ計量経済学」の手法を応用し、開発政策に対する含意を得ることを目指している。すなわち、本書において著者は、貧困削減という、1990年代以降の国際的な開発・援助政策における最優先課題に、経済学的手法を用いて、まさに正面から挑んだのである。本書には、貧困・脆弱性を扱った既存研究の広汎なサーベイとともに、著者による近年の研究成果がまとめられている。

なおここで「脆弱性」(vulnerability)とは、近年、途上国の貧困問題を扱った報告書や論文に頻出するようになった用語であるが、本書によると、それは現在の状況よりも将来に焦点を当てた動学的概念であり、将来において絶対的な厚生水準が低下するリスクを指す。脆弱性の問題に対しては、本書では主に後半に、家計の動学的ミクロ分析を駆使してアプローチしている。

II.

本書は、2部構成からなる。第1部「貧困の経済分析の基本」において、主に貧困の静学的側面を、第2部「貧困・脆弱性の動学的ミクロ分析」において、貧困の動学的側面、脆弱性の問題を扱っている。4章からなる第1部の1章においては、貧困の概念と計測に関わる基本的な事項を、2章、3章においては、それぞれ、家計レベルのミクロの貧困分析と、国や県レベルのマクロ・セミマクロの貧困分析を扱っている。とくに統計的な処理の問題を重点的に解説しており、例えば、貧困指標がミクロの所得ないし消費水準から計算された2次のデータであることを考慮せず、貧困指標を被説明数とした回帰分析を行うことの問題性や、県レベルの平均消費、貧困指標、不平等指標を同一同年の家計調査データからそ

れぞれ計算した場合、定義上これらの変数は独立でなくなることの問題性等を指摘し、改善策やその実例を提示している。4章では、開発経済学において近年急速に進展した分野であるミクロの貧困削減政策のプログラム評価に関する研究を展望している。

第2部の導入としての5章では、貧困の流動性や脆弱性に着目する意義の大きさを、時系列の定量的データを俯瞰することで示しつつ、脆弱性分析の対象とする期間の範囲を明確化している。6章では、貧困の動学分析や脆弱性分析のための理論的枠組として、「不確実性下の動学家計モデル」、すなわち、所得が一時的に変動するリスクに晒されている家計が、将来を見越して消費や投資を決定する理論モデルを示し、動学的な貧困、脆弱性の分析と結びつけて解説している。7章では、脆弱性を定量的に測定する指標として利用可能な様々な指標について展望している。具体的には、1. 貧困推移行列分析、2. 消費低下の決定要因回帰分析、3. 貧困の一時的要因と慢性的要因への分解、4. 所得ショックに対する消費の「過度の反応」パラメータの推定、5. 将来の貧困指標の期待値、である。諸指標それぞれの有用性や限界を示すことで、複数の指標を複眼的に用いることの必要性を強調している。このうち、3と4の指標については、続く8章、9章において詳しく扱い、指標の推定値の頑健性に関する理論的検討や、可変係数モデルによる推計式の改善等、著者オリジナルの研究成果を披露しつつ考察を深めている。終章においては、途上国の貧困・脆弱性分析の今後を展望しつつ、動学的視点、複眼的視点の有効性や、開発政策への応用可能性について論じている。なお各章において、膨大な既存研究が整理され、かつ、パキスタン農村等の家計データを用いた実証分析の実例が示されていることを付言しておく。

III.

まず、本書のねらいとして、貧困や脆弱性の分析にミクロ経済学的な基礎付けを与えることによって、貧困や脆弱性に関わる諸研究をミクロ経済学の中に位置づけるとともに、それらを統一的に理解するための枠組みを提供するという大きな意図が看取されたが、そこに類書に見られない本書の独自性と価値が存在すると、評者は考える。そのような姿勢は、1章1節から、間接効用関数の概念を用いて、「所得」とは、特定の源泉の所得ではなく、消費可能性の大きさを計測していることを丁寧に解説することに始まり、以降、本書の全体を通して貫かれている。後半にはより前面に押し出されるが、中でも、6章における解説の一連の流れは秀逸であると、評者は感じた。6章は、貧困動学、脆弱性分析の理論的枠組みを解説している章であるが、そこではまず、異時

点間の消費平滑化の標準的な家計モデルが、所得のフローを外生的に扱った形で紹介される。しかし、途上国においては、農家や零細自営業は家族労働力を多く用いる等の理由で、所得の平滑化のほうが実行されやすい場合があり、また、農地・家畜・人的資本といった生産資本が消費平滑化のために犠牲にされる場合もある。そこで著者は、これらをモデルに反映させるために、所得の内生化された農業家計モデルを動学化し、なおかつ、それを脆弱性の文脈に位置付けて再検討することで、動学的に貧困に陥るメカニズムを4つに分類して提示している。そのうち2つは、所得を生生化した動学モデルによって分析可能となったものである。このように、本書は、フォーマルな定式化に依拠することによって、途上国における動学的な貧困のメカニズムに関して、実に明快な概念整理を実現しているのである。

本書のもう一つの大きな特徴は、定量的データを扱った実証分析の手法や政策分析への適用に関して詳細に解説された実用的な研究書となっている点である。家計データの扱いに始まり、統計的な処理の問題に関する数多くの指摘、パキスタンの家計データを用いた実証分析の豊富な実例の提示等、これほどまでに実践的教示に富んだ途上国の貧困やミクロ分析に関する研究書は、邦語においては他に例が無いと思われる。昨今の国際的な開発援助の潮流として、客観的根拠に基づいた貧困分析や政策評価に対する要請が著しく高まっていることを考えれば、本書の計り知れない価値が理解されるだろう。

その他、本書の中には、個別的分析に基づく数々の貴重なファインディングスが存在することを強調しておきたい。全てに触れる紙幅がないのが残念だが、例えば、8章の分析は地味ではあるものの意義深いと思われた。そこでは、ラヴェリオンンの要因分解によって得られた一時的貧困指標の推定値が貧困線等の変化によって受ける影響を理論実証両面から緻密に検討し、最終的には、FGT 貧困指標に比べて、クラーク=ワッツ貧困指標の方が、頑健な分析結果が得られるとの結論を得ている。ラヴェリオンン要因分解を行っている既存の大部分の研究が、FGT 貧困指標を採用してきたことを考えると、上記の著者オリジナルの指摘は大いに注目されるべきであろう。

一方で、理論と実証の結びつきについては、やや物足りなさを感じさせる面もあった。動学的貧困を扱った第2部において、ミクロ経済学モデルと最も関連の深い実証分析を扱っていたのは9章であろう。所得ショックのプラスとマイナスを分けた可変係数モデルによるTownsend(1994)の計量モデルの拡張等は意義深い貢献であると思われたが、理論面では、ベンチマークとして「完全なリスクシェアリング」モデルが言及されるにとどまり、パラメータの持つ理論的意義はそれほど明確にされていないように思

われた。リスクシェアリングについては著者も言及しているように(pp.265-266)、「不完全なリスクシェアリング」モデルに関する研究が急増しているので、それらとの対応関係等のさらなる検討があって良かったと思われる。この分野については、近年発達の著しい内生的なネットワーク形成(endogenous network formation)のゲーム論的研究との融合の動きも見られるので(Bloch *et al.* (2008); Krishnan and Sciubba (2009)等)、今後、益々の研究の進展が期待されるだろう。他では、6章において、消費平滑化と所得平滑化の双方を取り入れた理論モデルに関して、実証分析の実例が乏しかったことに、やや消化不良の感を覚えた。

また、本書は、家計調査データの扱いについて、様々な注意点を喚起するなど、その利点と限界を詳しく解説しているが、そもそも、現行の家計調査の方式を前提とするという点では限定的な枠組みを堅持しており、その枠組み自体に対する是非や改善策等の検討はしていない。しかし例えば、前述の途上国農家のリスクシェアリングの研究では、通常の家計調査の後に、二次的な調査として社会関係のネットワーク的データを収集し、両者併せて分析する研究など現れているように(Fafchamps and Gubert (2007)等)、調査枠組み自体を再検討することによって分析の幅が広がる可能性は大きいと思われる。また、地域における親族や家族のありかたを考慮したときに、家計という単位の持つ意味はそれぞれ異なると思われるが、それらは、貧困指標の集計、消費(所得)回帰分析、リスクシェアリング等の点でどのように反映され得るのか、個人的に関心を持った。

いずれにせよ、本書は、途上国における貧困・脆弱性研究の分野に重要な礎石を築いた研究書であることに疑いなく、長く読まれ、参照され続けるに値する労作である。最後に、途上国の人々にとって最も深刻で喫緊の課題に、熱意を持って真っ直ぐに取り組まれている著者の研究姿勢に、心からの敬意を表しつつ筆をおきたい。

## 引用文献

- 黒崎卓(2001)『開発のミクロ経済学—理論と応用』岩波書店。  
 Bloch, F. *et al.* (2008) "Informal Insurance in Social Networks," *Journal of Economic Theory*, Vol. 143, No. 1, pp. 36-58.  
 Fafchamps, M. and F. Gubert (2007) "The Formation of Risk Sharing Networks," *Journal of Development Economics*, Vol. 83, No. 2, pp. 326-350.  
 Krishnan, P. and E. Sciubba (2009) "Links and Architecture in Village Networks," *Economic Journal*, Vol. 119, No. 537, pp. 917-949.  
 Townsend, R. M. (1994), "Risk and Insurance in Village India," *Econometrica*, Vol. 62, No. 3, pp. 539-591.

【樋渡雅人】